

名 前	作 品
赤瀬川至安	胃カメラはまつぴら御免三鬼の忌
	野遊びの胸の揺るるを眩しめる
	法師蟬ツクツクホーで終はりけり
	見るだけと言つてみた筈秋の服
	螻蛄鳴くや捜査一課は殺人課
	どう見てもおつかない人衣被
	淋しさに妻のショールを巻きにけり
	煮凝や訳のわからぬへブライ語
	セーターに出口は四つ大欠伸
	歳の市目立たぬやうに春画あり
赤松桔梗	コンビニのおでんの味に挑む妻
	白木蓮紫木蓮皆目もくれん
	買い溜めて一夜明ければ四月馬鹿
	春椿事六甲嵐の威勢良し
	どんなもんじゃこんなもんじゃとなんじゃもんじゃ
	時の日や長兄時夫几帳面
	しょんべんという武器持てり油蟬
	猫じゃらし使えば猫も木を登る
	じょごじょごと霜夜に長きしょんべんよ
	ジャンボくじ末等当選継続中
網谷千代子	まつ先に校長先生風邪をひく
	軒氷柱透けゐる顔も更年期
	水漬の子を見て一日嬉しかり
	雪積もり積もり血圧高くなる
	命の灯揺らぐダイヤモンドダスト

	たまさかの冬日を浴びて転びたる
	波の花塊なれば白からず
	吹雪三日犬の躰を聞いてゐる
	包丁を研げば流氷哭きにけり
	着ぶくれて許す許して許さざる
栗倉健二	猫喫茶猫をさかなに花見かな
	陽を浴びて花を浴びて猫ののそりかな
	うなぎ跳ね猫手を出して引っ込めて
	スピンの顔邪気無くて猫昼寝
	セレブ猫ねずみ獲らずに金魚盗り
	猫踊る団扇とジャラシの区別なく
	七五三猫も子猫を連れており
	手を舐めて狩猟の後の猫化粧
	節電や猫をアンカに膝を抱き
	ゆるきゃらの猫くじを買う年の暮れ
飯塚ひろし	大寒の海に負けじと声放つ
	孕み猫子女教育の教材に
	亀鳴くや売れぬ田圃の草伸びる
	田に足を入れ早乙女と呼ばれけり
	豊満な胸の谷間に汗疹かな
	水着にて葬儀の列に迷ひ込む
	虫干しや論語の横に艶書置く
	松茸を紙より薄く切る技術
	狸罨かけて大鍋買ひに行く
	顔中を使ひ赤子の嚏かな
池田亮二	狼の末裔美女の膝の上

	うがいして羽洗うて来よ渡り鳥
	忘八も老いの哲学山眠る
	入道のかつらずれたり露天風呂
	ど突かれて鐘が泣くなり大晦日
	初詣被災の神も仮住まい
	狼もちらほら見えて未年
	成人日降って湧くごと大振袖
	帰命頂礼九条は呪縛か和心か
	日向ぼこみな一病を持ち寄りて
板坂壽一①	初鴉せがれ遠のくばかりにて
	おほよそは人為なるかな初景色
	御賀詞ぞ嚙め皇居の鴉ども
	孫よ聞け卒業式のわが国家
	人ならば裁判沙汰ぞ孕み猫
	寄り行かば反吐も見るべし遠桜
	肩書のやたら飛び交ふ花見かな
	蜂加速いかにも燃費わるさうに
	わが息のシャボン玉にも出来不出来
	七部集をまたも添削して日永
板坂壽一②	歌はざる茶摘機囃す鴉かな
	カレンダーの五月に増やせ一週間
	黴くさや二言めには出る師系
	海の日や私の耳も貝の耳
	汝が家は雨漏りせずや蝸牛
	長寿法かあの水馬のサボリやう
	気障ながらマイアミビーチも知る裸足

	聞き役は二割前後かビヤホール
	アンテナの新奇を誇る帰省かな
	まだ入る位牌の余地や盆支度
板坂壽一③	ほぼ満月あんなマークもありしかな
	名月やまだ原発は建たぬはず
	無駄鳴きと聞くは無粋か昼の虫
	色鳥やケーブルカーは人の籠
	太刀魚やけふ斬り抜けし審議会
	笑栗や笑ひをうとむ「詩川柳」
	鬱が鬱をなぐさめんとて小春道
	癌も放(ひ)れ枯野に糞をせし仲間
	実万両の見張りか帰路も吠えやがる
	冬銀河ブラックホールはけだし無季
伊地知寛	春愁や奥歯にももののはさまりて
	竹皮を脱ぐ金曜日午後三時
	安土城跡遠廻はりして時鳥
	豆腐屋を起こして廻はれ時鳥
	江戸前はハワイ沖縄鰻喰ふ
	ガリレオも自信なくする天の川
	コーヒーに茶柱が立ち厄日過ぐ
	柿喰へど子規の前には鐘鳴らず
	門前の柿屋寄贈の鐘がなる
	家元も百円傘の初時雨
今城夏城	寒鴉村を偵察してをりぬ
	豪雪のやう満開の雪柳
	あの河を渡りきれずに秋の声

	海鼠切る海鼠の正体暴かれず
	不確かに向って歩く春の塵
	蔓の手を俗世に伸ばし忍冬
	躁と鬱同時に降りし春の雨
	水に映る影のゆらゆら花菖蒲
	一年の垢少しつけ年果てる
	わたくしに向ひくる蜂唸り立つ
上山美穂	月光を浴び花びらのパズルめく
	菜の花の人生に似るほろ苦さ
	スコールの忘形見の虹のはし
	朝顔のスープがいるの支柱でしょ
	割れば真白や白粉花の種
	つまみ食ひ太ってばれる神無月
	大晦日悪夢はブラックホールいき
	喪中でも元旦のポスト覗き込む
	書初の筆の枝毛の今年流
	朝日のシャワー浴びて駆け出す一年生
梅岡菊子	逃げる蛇その一筆の草書体
	天空の虹をドレスに仕立てたし
	冬の海わしずかみにして鳶舞へり
	茗荷の子花リボンつけ顔をだす
	台風のめのなかにいる夕餉かな
	ジョウビタキどこで買ったのお洋服
	観音さま両手に花のすまし顔
	薫風やお遍路橋を吹きあげる
	春落葉路面電車を追いかける

	読経をききをり禅寺の乳母桜
海野兼夫	世の中は甘くないから桜餅
	妖精の眠り薬と春風と
	紫陽花は妻の吐息を吸ひて咲き
	少年のまま老いて今年もサクランボ
	冷奴その日暮らしのいさぎよさ
	悪いけど眠れないのと蚊を叩く
	砂時計返してみても冬隣
	かじかみて御愁傷様言ひ難し
	日向ぼこ音痴親父の子守歌
	宵えびすアジアの雑踏好きやねん
遠藤真太郎	家事育事メモ渡さるる女正月
	UFOや狐火席を譲り受け
	消しゴムの知りたる頭脳大試験
	遠足や傘屋の軒の照る坊主
	鶯の餌が先よとむせかへり
	鬼灯の種忍ばせて墓参団
	徳島の色なき風は青くなり
	冬ざれて銀幕の猛者御蔵入り
	アフリカに行かねばならぬ日記買ふ
	大法螺をまことよろしき忘年会
大澤酒仙奴	逃げ水やツイとよぎりし人面犬
	廃屋に招く白き手半夏生
	こっくりさん今日は夕立というお告げ
	ほのぼのと幽体離脱寝待月
	池の月すくい損ねし李白かな

	妻食わぬ茸炒めをいぶかしみ
	おでん酒振りて覗きてしたみけり
	薔薇色の影揺れる窓火事近し
	空風やあつしにゃ関わりねえことで
	住職の小さき手招きもみじ鍋
太田チエ子	縛られて白菜並ぶ畝の上
	親よりも子芋の髭の長々と
	股割れの太き大根引きにけり
	二股も三股もあり大根引く
	栗拾ふ縄文人の真似をして
	四尺玉花火の傘に入りにけり
	全長を曲らせ蛇は動き出す
	栗の花ほかの匂いを寄せつけず
	紙カイロ付体操会へ急ぎけり
	かりんの実苦しきまでに無骨なり
大林和代	水漬引き際知らず風に遊ぶ
	蛸焼の旨いのはここ初詣
	文句などもう消えてゐる冬青空
	落葉とて若さがよろしハイヒール
	風邪薬喉をはづれてうろうろす
	かけ違ひ気づかぬ一日悴める
	暖房に頬そめ婆の乙女めく
	着ぶくれてもういらぬもの診察券
	裸木へ私の脂肪くれてやろう
	冬空へ弾みつけ飲むサプリメント
岡崎 淳	沢庵の甘さに和む師走哉

	宝くじ買う人波に目くじらを
	雪だるまとけても春はまだ遠し
	太目でも良しキティー似の花嫁は
	もじもじとおずおず出会う見合哉
	サンタ役縁起をかつぐ忘年会
	角力取り軽みの境地で横綱に
	大判の和菓子味にも太鼓判
	古代魚の笑みまた楽し福笑い
	初夢は馬車に乗る羊の姿哉
岡まゆみ	年新た世界遺産を狙ひをり
	女子会の元をたどれば女正月
	パック入りおもち黴びずに捨てられぬ
	冷蔵庫生きて死にたるおせちかな
	クリスマスいつのまにやら過ぎにけり
	マフラーを思いきり巻くニューファッション
	スケートの国技となる日近そうな
	大晦日やっぱり紅白見てしまふ
	湯湯婆の敗者復活となりけり
	福袋すき間のぞいて持ち上げて
小助川雅人	スリッパは凶器となりて油虫
	茶柱の斜めに浮かぶ新茶かな
	季語と知り後ろめたさの無き昼寝
	親しくもなき人とゐて流れ星
	酔ひ覚めは終点の駅星月夜
	親不知抜きたる穴に秋の風
	珈琲に溶けて消えたる秋思かな

	ペンギンのごとき歩みや七五三
	独り身の我を訪ふのは嫁が君
	漱石忌猫の句だけは書くものか
小田和子	かまくらの方が広いと云う息子
	マスクした娘の目の化粧だけで済み
	陽だまりのダイエット法雪だるま
	焚火って何かと街の園児問う
	スキー好きすいすい世渡り何故出来ぬ
	リーダーは誰なのだろう鴨の群れ
	節分の鬼は当然お父さん
	濁声の恋のワルツや猫の恋
	白魚のような指より目立つ爪
	皆受かる試験は受けぬ受験生
織田博子	四季誇る日本師走の苺かな
	24時無休スーパー初売す
	除外日に皆当てはまる花見時
	あれあれと不毛な会話毛糸編む
	チューリップ子はばらばらのままで良し
	新しき年古りし身を奮い立て
	借金も貯金もなくて年守る
	声量と場所わきまえし豆まきや
	兄の手を見て払い取る初歌留多
	初夢の賽銭となる投句料
小田慶喜	同じこと云う齢となり去年今年
	もう跳ねる事無くひとり雪やどり
	初場所の力士に負けぬ腹回り

	蠟梅を老害と聴き狼狽す
	山眠るように眠れぬいびき音
	妻くらい怖いのだらう雪女郎
	玉子一液体九の玉子酒
	冬銀河見上げりゃ涙溢れ出す
	伊勢海老の髭だけ入るお味噌汁
	日脚伸ぶ帰宅時間も徐々に伸ぶ
織田亮太郎	青蛙水のディテール照り映える
	鉄線花数多の変化へと引火
	揚羽蝶奇異な色調とふ主張
	酔芙蓉路頭に迷ふ色模様
	生御魂なるは時たま石頭
	雪螢弱きメンタル物語る
	冬牡丹臥薪嘗胆とふ忌憚
	初化粧年齢詐称して微笑
	飛花落花屋上緑化せる一家
	蜃気楼浦島太郎なのだらう
加川すすむ	国宝はさておき土産花の古都
	天に尻向けてザクザク汐干狩
	枝豆やまさに父似の指づかひ
	美しき嘘も浮かべてレモンティー
	鉄人と呼ばれ風邪とも言ひ出せず
	躓きし石に罪着せ懐手
	付くうちが華てふ寝ぐせ冬木立
	肩書の主夫堂々と葱を下げ
	名前負け笑ふ親子の炬燵かな

	少子化の秘策も練つて日向ぼこ
笠政人	石鹼玉成層圏まで行くつもり
	鳴けよとて鶯餅の尻つまむ
	金輪際獲物はなさぬ蟻の道
	死角なき竿頭が好き鬼やんま
	ひね具合競ふ隠居のへちま棚
	敬老日華麗に加齢し給へる
	子規ほどは食へぬと啜る柿の数
	顎吊つて鼻かくさずのマスクかな
	牡蠣食へば鐘が鳴るなり安芸の国
	異性とのハグ憚らず初句会
片山じゅん	櫻咲き戀という字がまだ書ける
	春障子柱どちらか拗ねている
	新涼や鉛筆書きのラブレター
	彦星に針千本を用意する
	あこがれのあの頃ありし赤とんぼ
	天高し内臓脂肪ないことに
	通帳はお出掛けのまま秋の暮
	魂胆のありありと見ゆ神の留守
	長き夜を使い切っても句の成らず
	景気など関わりなくて蕪育つ
金澤健①	春眠の一人を残し散会す
	天の水収支合うまい梅雨ながし
	はしゃぐ水噴水の域はみ出せず
	背泳ぎの負けず嫌いが雲と競る
	立泳ぎ一掻きごとの無常観

	ごきぶりを凍りつかすや夜の悲鳴
	墓洗ふ本音や石におもてうら
	うそ寒や俎上の鯉のひと睨み
	底冷や犬より移る武者震ひ
	精尽きて日めぐり細る十二月
金澤健②	鳥帰る在留ビザの切れぬ間に
	美食家の紙魚の文豪しか喰はず
	万歩計興に乗ずる蛍狩
	名前より顔より香水記憶さる
	血液型不適合なく蚊の元気
	尻に火がついて本気の出る蛍
	端居して上座下座にこだはりぬ
	毒きのこ念を入れたる厚化粧
	人の愚痴染みておでんの深き味
	酔ひ覚めの寒九の水やなんまいだ
金澤健③	人を見て鳴きどきさぐるほととぎす
	牛鍋や一点めぐる攻防戦
	子を産めや国を愛せと秋暑し
	炉辺話昔のことと逃げを打つ
	凍鶴や惰性にはしる決めポーズ
	地芝居の死体の無聊尻を搔く
	ぶしつけに初雪積もり皆黙す
	灯りつきしばしの絶句闇夜汁
	負将棋西日のせいにして終る
	のどかさや一人笑へば皆笑ふ
金山敦観	蛩声の部活酒なく花疲れ

	不気味なる季語を作られ山笑ふ
	挨拶の社訓縷々聞く入社式
	弔問の酷暑に長き法話かな
	青雲の卒業長き祝辞かな
	「清張」の描く燕や点と線
	合理化の報恩講や一切経
	陶醉の読み手何時しか歌留多取
	作陶の焰任せや窯始
	栄転の駅頭に舞ふ枯葉かな
川口聡美	子育ての相手がおらず寂しいな
	彼氏がね確かにいたよエア彼が
	人が言う私はレズだと違うのよ
	ドイツへね住んだことあり一生言われ
	もう二度と実家に暮らす気なかったのに
	働かないそれがそんなに悪いのか
	金がないとうとう頼る障害年金
	キール市で子どもを育ててみたかった
	葬式の金用意なく献体登録
	母元気娘が逆に介護され
川島智子	春うらら傘寿は三十女子会へ
	極楽へ急ぎて渡る虹の橋
	誤字多く願ひとどこかぬ七夕紙
	裸木の銀杏大樹の仁王立ち
	落葉焚焼薯焼きも夢の中
	凧や男の嘆きともきこゆ
	赤子抱くやうに大根大切に

	大根も大根役者もいとほしむ
	惚けても忘れぬ軍歌敗戦忌
	老いの身に命がけなりお雑煮は
木本康雄	雪道を譲って落ちた奈落かな
	大陸の雪も積荷に計上す
	海苔岩にかもめのジグソー未完成
	めまといがツールド・ジャパンを妨害す
	鴨鍋が煮えるがまでの犬自慢
	強東風に舳先を向けて沖待船
	水遣りてはや向日葵に背を越さる
	父の日に背を流しあう親子孫
	名刺よく切らせて春は人に会う
	菊展を人に疲れて宮をでる
久我正明	春や昔私の子規であった頃
	薄氷をそつくり奪ふハイヒール
	生まれつきよろめく癖や穴惑い
	地下足袋が頭上を歩く春の昼
	ひたすらに謝る人生冷奴
	謎秘めし妻の寝顔やハンモック
	人生はサスペンスめく鳥兜
	妻が我捨てて行くなり草の花
	橋ひとつどこにもなくて天の川
	名月やこんな団子じや悪いわね
久我正明	人参を洗ひし巫女が絵馬を売る
	違ふ人から貰ふバレンタインデー
	受験子の一男去ってまた一男

	父母兄弟幾度も死なせ万愚節
	背泳も溺水もあり鯉のぼり
	人間になれない神やしやぼん玉
	かの人横綱歩き木葉髪
	やわらかき猫背の猫の日向ぼこ
	棲むの字に妻を残して冬の旅
	大晦日歌手の下りくる千枚田
神戸酔気	割り箸の先で頷く盆休み
	蟬鳴くや推定歯茎剥き出しで
	冬の星よく似た名前入選す
	春風やてんてこまいのセロテープ
	パソコンのマウスも走る師走かな
	静電気何か集めてしまひけり
	もろこしを嚙る心を鬼と化し
	秋の夜寝たふりすれば寝ることも
	乾杯の文字に従ふ暑さ哉
	尾頭つきの鯛焼きや腹から割る
小林英昭①	ヴォーカルは一本高き葱坊主
	針供養とうふの肩も凝るらしい
	春服をまとへば鳥になるわたし
	涅槃会の不在投票すます猫
	眼の隅に親を坐らせ卒業す
	春愁や月までのびる象の鼻
	箱入の甲斐なく虫のつく雛
	天井に二泊三日のゴム風船
	亀鳴くや乙姫さまの通夜の席

	蝶むすびすぐにほどける麦畑
小林英昭②	さやゑんどう一家団欒してをりぬ
	ときどきは油切れする蟬の声
	葉桜やだめでもともと育毛剤
	幽霊に足を洗への無理難題
	蛞蝓に光かがやく過去がある
	箱庭をマルサの女うろつきぬ
	憂鬱な章魚のキッチンドリッカー
	特別に西日つけしといふ大家
	たびたびの余震なまづにまた嫌疑
	陶枕の穴にふたりのないしよごと
小林英昭③	利き酒やコップの渦にまはる酔ひ
	とんぼうに二墨ベースを盗まるる
	愚痴の数だけ枝豆の莢のこる
	今年酒モーツアルトに育てられ
	ボトルごとキープしてをきたき夜長
	月光やしきりに匂ひかぐライオン
	特急でことしも帰るてふつばめ
	借金は水に流せと墓洗ふ
	楽園のりんごに蜜のしかけられ
	阿波踊俳諧に似てちと滑稽
小林英昭④	ストールに笑ひ声までかへるママ
	小春日はいりませんかと行商女
	穿きながらパンツ乾かす神の留守
	茶筆筒に折られて鶴は冬を越す
	こたつ猫もふよからうと回顧録

	寝技にて一本勝の七五三
	大根の味よきけふの幕の内
	美辞麗句沁みついてゐる金屏風
	うちの嫁雪女かも風呂嫌ひ
	浮いてゐる柚子におませなのがひとつ
小林英昭⑤	夕日でもひと味がふ昭和の日
	蟻どもに足で稼げの檄がとぶ
	団欒をはじめだされて父端居
	顔中を口におねだり燕の子
	バナナ二本立たされてゐる運動場
	隙間風吹きはじめたる築十年
	山頂が本籍地なり赤とんぼ
	散らかしてますと山茶花赤面す
	口ほどに足のものいふ炬燵かな
	できちやつたなんてしれつと春の猫
佐藤志乃	九十の父が新車を買ふ五月
	春ごたつ認知の母とグウチヨキパー
	とりあへず柚子湯に入つて泣きました
	皮ジャンはやはり健さんだけ似合ふ
	雪道を君と一緒に転んだね
	一茶忌や村にお馬も子もゐない
	針に糸通せなくなり一葉忌
	寄鍋や愚痴と自慢を聞かされて
	頬被りしている現場監督も
	嬰のやうに包まれたいよねんねこに
下嶋四万歩	裏口のおぼろになりぬ卒業式

	向日葵や首の疲れしものもゐて
	火遊びもなかには交じる水遊び
	金扇風を起こせど風は風
	大夕焼西へ西へと消防車
	サイダーのコップの中の嵐かな
	扉の間より旅立つ神をたしかむる
	妻とゐて世の人恋し秋の夜
	干蒲団火のつくやうに叩きけり
	風邪引いて存在感のある鼻に
寿命秀次	羽根つきに思はず真似るエアーケイ
	鼻っ柱山葵に折られ泪なり
	カップルに一役買ひて舞ふ蛍
	夜叉と姫妻に潜むや百合の花
	夜空から巨乳打ち抜く大花火
	帰省子の児を出汁にする朝寝かな
	間引き菜の背負ふ根も葉もなき噂
	林檎にも妻にも立たぬ歯の哀れ
	老中の登城駕籠の如煤逃げ
	年の瀬に当てなきネコや飛脚待ち
白井道義	年頭にあたり新たな辞世の句
	初夢にどんでん返し喰ひにけり
	参道に押しくらまんじゅう初詣
	添へ書きに犬の近況賀状来る
	子に貰ふ年玉孫の受験料
	決め台詞しどろもどろに年始客
	父の背に拍手打ちて悴める

	姫始め知ったかぶりの勘違ひ
	三が日だけの目標立てて酌む
	やっこさ間に合ふ十句松明ける
白川義人	かくまでに他人事なるか通夜の酒
	世の中のルールのレールを乗り継いで
	花筏砕氷船の鴨の胸
	樹下へ避け雷鳴轟き雨へ逃げ
	若しかして近親憎悪か猿嫌い
	腑甲斐なく酔い寝駘河の大吟醸
	三合が正味期限と妻の顔
	おおと言いやがて舌打つ雪の朝
	大寒波炬燵へ移す現住所
	拍子木より談笑多き火の用心
城山憲三	袴を脱ぎ散らかして年忘
	グローバルと云ひつつ急かす雛納
	老いるなど云ひたる汝は負真綿
	宝くじそつと吊しぬ星祭
	断捨離と唱ふる人や木の葉髪
	人並みに風邪引く安堵ありにけり
	秋の空知らざる歩きスマホかな
	四の五のと云はぬ捨苗意気やよし
	嫌々をしつつも運命扇風機
	鯉幟尻尾の休む隣屋根
鈴木千尋	運勢はときめく女難初占ひ
	俺にはね過ぎたる女房福寿草
	初明り我もただよふ埃かな

	正座して顧みにけり初悪夢
	賀詞申すニャーとも言はず尻尾振り
	初詣いのちことりと果つること
	人真似を笑ふ愚笑ふ猿大夫
	結婚は所詮賭けなり懸想文
	賀状にも目隠しシール貼る世かな
	塗り残す車中化粧や初仕事
住野寿一	冒頭で松茸挨拶つぎ次席
	生け捕った手中の蟬を猫食らう
	夢心地布団を退けて春に起き
	ハエの食事一時間置きの煙草かや
	芋嵐雷よりも落ちた傘
	鍵の音秋刀魚が帰る猫が鳴く
	不平不満一発咬す放屁虫
	羽広げ酒場で賑わう兜虫
	タバコの害何処吹く風と真冬空
	木枯しや赤文字運ぶ添削紙
高橋マキコ	着ぶくれて荷物もふくれ冬の旅
	野菊かな古代ローマの遺跡にも
	小雀ら群れてフンガイ獅子の像
	モノトーンなりミラネーゼの秋の色
	これがその火刑場跡冬木立
	ローマ水道どこまでも翳雲
	魔女たち繰り出すミラノのハロウィーン
	馬子にも衣装スカラ座秋の宵
	ダヴィンチも訪ねた城よ秋高し

	冬帽子ミラノの人になりきれず
高橋素子	風邪の人もしやあの人エボラかも
	喜ばば鰻の臭ひはお隣よ
	傷見せて三針縫つたとちゃんちゃんこ
	北風に大安売りのビラ貰ふ
	落蟬を囲む黒服蟻の列
	たちまちにお国言葉の帰省の子
	梅雨の波子の砂山に牙を剥く
	ぼうたんの崩れる音を聞きにけり
	部屋の隅蟋蟀鳴かせて喧嘩の夜
	優しき眼乱暴者の台風も
竹澤聡	幼鳥の飛翔つたなし山笑ふ
	明らかに不調の音の耕耘機
	初心者のぎこちなく振る補虫網
	厨房の音にぎやかに大暑来る
	秋に入るぶつきらぼうな山男
	ひげ面の野球選手や秋暑し
	予報士の予報外れて天高し
	秋惜しむ鬼監督に叱られて
	はじめから滑舌悪く悴めり
	日向ぼこスマートフォンをいぢりつつ
立花 悟①	初茜ビルは自画像映し合う
	健さんも文太も居らぬ絵双六
	ペットかと覗けば赤子うらけし
	青嶺より代引きですと届く護符
	鎌を研ぐ我に何かが日雷

	ニッスイの鯖の照焼季語ですか
	これからが青春夫の墓洗う
	芒野の記憶に若き母の尻
	寝たきりの田畑抱いて山眠る
	納豆の糸でつながる朝の笑み
立花 悟②	姫始サイン見ぬふり知らぬ振り
	ほくそ笑む他人の不幸揚ひばり
	暇あらば自分を磨けさるすべり
	脚立ごと倒けて見送る熊ん蜂
	食害は他人事です鳥兜
	憎まれる役こそ要鶉の声
	偉ぶるは偉くないやつ河豚汁
	孫囲む隣の聖夜盗み見る
	暖房の便座に長居手にスマホ
	熱爛やタレント遊ぶテレビ消せ
立花 悟③	油揚げに託す一年初詣
	四日はや葬儀プランの大ちらし
	春休みスマホ知らずの金次郎
	今宵また鯉のタタキ南無大師
	セキュリティー任されており燕の巣
	LED街路樹に蟬鳴き止まず
	お互いに奇人変人どてカボチャ
	こんにゃくが好きかと防犯カメラ云う
	大手みなホールディングス実万両
	日向ぼこところであんた誰ですか
田中早苗	冬籠りテレビは濡れ場最高調

	睦み合ふことも忘れてかまど猫
	旅立ちの準備をさをさ沙羅の花
	世も末法墓の墓とぞそぞろ寒
	お犬様ブランド物にて初詣
	虎の子と粉ふる猫に賀状受く
	鳥居よりしづりしづりと冬至の日
	夫婦岩に又来年と雁の棹
	雪降るや兎の瞳採りに出る
	敗戦日古稀迎ふとかわしや傘寿
司 ぼたん	あらたまの四方にころがる正露丸
	思考してぬくめ便座を寒四郎
	新成人の母にピアスの穴三つ
	七変化女ですからはなっから
	実梅落つ着替えの背中見られたか
	炎あげ串焼き売のサングラス
	よく凹む空缶秋の麒麟草
	芋虫やインナーマッスル使いもし
	眉動くマスクの医師が口の上
	熊穴に蟄るポケットウキスキー
塚本和子	飛魚の日本一より世界一
	認知症の文字に反応がまがへる
	青大将ポルトガル語を教へてよ
	柿たわわ旅館のやうな公民館
	千社札貼りて蛇穴に入りけり
	リヤカーに孫と野菜や頬かぶり
	日向ぼこ次は何処いこ婆三人(みたり)

	着ぶくれて鍵・金・携帯忘れるな
	福笑ひ「いつき組」てふ結社かな
	初戒詣でにこにこ恵比須顔
辻 雅宏	初鏡うしろの夫にあかんべえ
	初詣今年は去年と違ふひと
	詠み終へて猫も手を出し歌留多とり
	ラブホテルこんなところにも雛飾り
	マネキンや惜しげなく見せ衣更
	衣更変わりぬ役所の受け答へ
	熱帯夜妻のいびきも加わりて
	講師また大風呂敷や休暇明け
	願いごと来月にして神無月
	湯豆腐に聞ひて欲しけり妻の愚痴
藤堂夏生	ねんねこや邪陰にゆらす他人の子
	犬に傘さして濡れゆく春の雨
	接木してふと定年の後のこと
	鳥声を聴いて木耳育ちけり
	スプレーを見て遁走の蠅を追ふ
	貴婦人になる夢むなし菜虫落つ
	美術展列を離れて人を見る
	銀杏と気づけばすでに踏んでゐる
	残る蚊のすり寄つて来る深情
	ボーナスや夫このごろ目を反らす
飛田正勝	がんばれと云ふ他はなき初便り
	読み人の知らぬ和歌(うた)より読始
	百薬の長ほどほどに薬喰

	父の日や親父と呼ばれ狼狽へる
	ケイタイの圏外の蟬一人占め
	今朝の秋父は何処まで行つたやら
	赤門を潜れば黄葉まみれかな
	聞き役になりて聴きけり虫のこゑ
	一汁に炊き立て飯や寒卵
	蕪村よりはせをに親し去年今年
西をさむ	新町の女泣かせて夕霧忌
	検屍にも一日のずれ西行忌
	小町忌やむかし小女の同窓会
	北斎忌世界遺産に登りつめ
	凡庸な男に生まれ業平忌
	幽霊に足の有る無し応挙の忌
	好色の代々つづく西鶴忌
	猫に鈴付けて晩学宣長忌
	達磨忌の壁に向かつて立たされて
	うちにかて意地はあるねん近松忌
野村昌弘	サクラチル散れど来春また咲かん
	鯉のぼり真鯉従え緋鯉居り
	五歳でも山菜と言ふタラ新芽
	怪談に劣らぬ効き目蚊の羽音
	食べ飽きたゴーヤに替えて葦簀張り
	氷水被るは猛暑なればこそ
	台風が列島に向く深情け
	掃除機が食卓に着く三が日
	放射線測りたもれと落の臺

	雪ダルマくびれあれどもメタボなり
橋野幸洋	寄居虫の家移り雨天決行す
	遠足や留守番もする照坊主
	肉球を愛で敬老の日を過ごす
	待ち伏せに不向きな男月笑ふ
	鬼胡桃 兎くぼの深さ競ひをり
	五十肩腕下ろせぬ案山子かな
	煙突の湯の名教へり冬の雷
	初詣あくび包める巫女の袖
	一年をほぼ寝て暮らす雛かな
	卒業歌悪女になれる声もあり
橋本正幸	お年玉てふ年金のお裾分け
	大風の引きずつてゐる五十人
	知恵袋重荷にならず卒業す
	昼寝して余世を減らしをりにけり
	境内をけんか祭に明け渡す
	ユニホームふどし一本宮相撲
	土色の肌着で生る小芋かな
	名月のあばたを暴露遠眼鏡
	文化の日死後に勲章などいらす
	老二人だけぞ煤逃げなどできず
橋本吉博	初場所や力士の背押す鼯鼠風
	顔あげず降るのを拾ふ追儼餅
	梁は貸そ留守は頼むぞ燕の子
	葉の後継ぐ気概満ちあふれ
	名優の其処に居そふな夏座敷

	小をして飛び去るこれぞ蝉時雨
	ふるさとに人呼び戻す盆の月
	鉄棒の露に魚眼の吾の顔
	干し柿に甘さ吹き込む里の風
	素通りを許さぬ声や赤い羽根
土生洋子	年間かれ大鯖をよむお元日
	初場所に沸き血圧の高止り
	大寒や万年床に人の穴
	ツチノコもカッパも眠る山河かな
	雛飾り横で雑魚寝の四畳半
	大雷雨力道山の墓洗う
	腹八分ビールで満たす風呂上がり
	笑い茸天狗茸いて文講座
	定食屋秋刀魚次々骨になり
	鋤焼の肉奪い合う喉仏
早川由美子	春来てもニャンともできない去勢猫
	つま先でそうっと乗る体重計
	当たるわけなくても夢見る宝くじ
	大声を出しても届かぬ競馬中継
	俺よりもいいもの食べてる妻の犬
	色白も七難隠せぬ年となり
	まくわうりメロンと喜ぶ団塊世代
	室内で飼われ捨てたよ野良魂
	意志強いだからたばこはやめません
	髪が消え女房消えても猫がいる
原田曄	猫パンチ子ねこととする倍返し

	三月や甘納豆が誘惑す
	ごきぶりと妻の確執とめどなし
	炎天へ無帽と云ふは無謀ぞや
	穴惑拾ふに迷ふ五円玉
	巻きかへて巻き返へされて負け相撲
	ねこ呼ぶも無視され一人日向ぼこ
	冬眠の鞆の底のイヤホーン
	門松は市より贈らる多色刷
	迎へたる覚悟の年を寝正月
久松久子	花吹雪我関せずと甲羅干す
	余り苗とかくこの世は運次第
	大皿に越前蟹の晴れ姿
	パソコンの矢印飛んで揚花火
	台風過何くはぬ貌の青空
	団体に紛れ説かるる紅葉寺
	枯蓮弓矢尽き果て杖となり
	国からの報奨もなく木守柿
	裸木に飛び付いてきたビラー一枚
	胃カメラに冬眠の蛇隠し撮り
日根野聖子	春炬燵足から抜けし思考力
	綺麗ごとばかりをしやべり春日傘
	美人台無し解剖学の春の昼
	持ち重りする甘夏と正義感
	甘つたるき歌のべたつく残暑かな
	易々と正義かざすな鴟高音
	引つ込めてばかりの道理翳雲

	焼唐黍ポップコーンじゃ馬鹿になる
	非正規てふ格差の国の勤労感謝日
	万難を排して何もせず小春
福士謙二	こ 炬燵とは昭和の恋の吹溜り
	つ 杖二本ひくほど危険雪の道
	け けちならずこれがエコなる雪明り
	い 頂きし歳暮の熨斗の滲みかな
	は 花咲かず齢も過ぎて鉢に水
	い 色も香も年に一度の盆踊
	く 来る年を拒みも出来ず寝て迎へ
	し 小水の二手に分かれ秋の暮
	ゆ 逝く時はそなたのごとく落椿
	う 嬉しさもこれが終かな初笑
藤井香子	お守りの各種あります初御空
	飽食といふ字覚へて夏休み
	苦瓜の紅さムクウの叫びほど
	逆鱗のごとき一片うろこ雲
	秋天や犬の血統など笑止
	陣形の崩れやすきよ稲雀
	境界を越へてゆくなり曼珠沙華
	鉦叩昨夜の続きより叩く
	晩秋の鎖骨に添ひしネックレス
	茹で過ぎのパスタ勤労感謝の日
藤森荘吉	目が覚めて考へて寝てまだ夜長
	コンビニの二十四時間夜ぞ長し
	長話長き溜息長き夜

	長き夜は自分眺めてゐる自分
	ドア閉めりやこつちの世界夜ぞ長し
	長生きで気長夜長の長話
	長き夜やののしり合つた後はハグ
	長き夜やかか想像も果てしなく
	長き夜や恋と打算が交錯す
	探しもの探しまくつてゐる夜長
藤原督雄	不倫せむ彼岸桜の道でこけ
	去るあなた羽がいじめにしまんじゅしゃげ
	実ざくろや恋は二股かけてこそ
	姫紫苑こやつのためにすべて捨て
	人食らふ鱻も順番待ちならぶ
	落第生いつも点滴冬ざる
	雲が山平手打ちにす冬晴間
	文なしでやけのやんぱち狂い咲き
	むささびも年金ぐらし後がない
	僧ひとりもんどりうつてる冬のばら
細川岩男	世間様ジングルベルでよろしいか
	歩く程生きていますと冬晴に
	年の瀬や無事にすごせて何も無い
	病気なぞそっと隠して年を越す
	とにもかく黙って来るよ年の暮れ
	世の中の嘘と現実去年今年
	とりあえず病忘れて御神酒飲む
	正月をめでたいと言う明日知らず
	初売りに顔色変えて無駄を買う

	得得と苦笑いする福袋
ぼん太	雀の子そこのけそこのけ戦車が来るぞ
	見ゆるものなべて臍に付け睫毛
	まさかとは思いつサマージャンボ買う
	本はイザ図書館という避暑通い
	おしっこの降るばかりなり蟬時雨
	土俵入りかとし妻のフラダンス
	ずっと来て松茸を買う客を見た
	着ぶくれて食前食後また薬
	大寒波諭吉は旅に出たつきり
	マスクして小さな嘘をついてみる
本間昭裕	選ばなきゃ【スタッフ採用 は有ります！】
	ふきのとう 新調スーツ 見送る子
	初恋は 白爪草も 頬を染めて
	ガンバレよ 帰省の後の 父の声
	何してる？ 白髪混じりの クラス会
	恋心 さっきと違う 空の雲
	眩いた フォローの数は 溜め息か
	惜別の 春よ涙に ちぎれ雲
	まだ若い 根拠を探す 鏡かな
	いつやめる？ 自問自答の 煙吐き
柊野雅憲	腑甲斐無き倅にもせむ成木責
	春蘭の鉢の値段も聞かれない
	たんぽぽや根には恨みを持つことも
	いい人と云はれ職場の余り苗
	後進に道は譲らぬ山登り

	赤とんぼ来年こそは甲子園
	姫よりも腰元が佳き村芝居
	居る筈の熊に伺ふ鈴鳴らす
	雪女体温計を買ひに来る
	駅伝と知らずに数多冬眠中
松井まさし	初夢は紅白幕から抜け出せず
	熱爛や宙で交接二人の目
	雪女の息浴び気抜け雪だるま
	くしゃみ出て吊革離るコメディアン
	こはごはと薄氷踏むも腰の艶
	わが掌離さぬ春愁の占ひ師
	マニキュアの指に遊ばれ蜘蛛の網
	蜃気楼見てゐる女も蜃気楼
	残る蚊に刺されシスター十字切る
	絵日記のサンタに持たすスマートフォン
松尾軍治	インディアン嘘つかないと山笑ふ
	九条をみやげ話しに鳥帰る
	生徒より先生気張る運動会
	不知火に雲竜いどむ大相撲
	きかせても聞く耳もたぬなまこかな
	つけまつ毛はがして聖夜おわりけり
	煤逃げの仲間が集ふ喫茶店
	番台の娘も八十路冬至風呂
	冬ごもり以心伝心テータム
	雪女雪男より大年増
松尾桜子	月に降り姫手造りの餅を食ぶ

	吾子のごと抱く冬瓜のつぺらぼう
	敬老日毛なし歯なしをとがめをり
	秋天と聞いてうつかり乗り過ごす
	花冷えに注意と言はれマスクする
	鹿せんべい残した分を鹿にやり
	欠けし歯を今宵の月と洒落てをり
	酔芙蓉禁酒の漢に自慢顔
	秋高しのら猫ちやんもノーベル賞
	木犀の香を追うふりをしてスターカー
松本みゆき	着ぶくれておしゃれ談義に花が咲く
	嚏してひと筆書きを書き損ず
	聞き役に徹して特大マスクかな
	語尾にある伊豫の訛りや墓
	親の出る幕の引き際桜桃忌
	TPO 切り換え上手サングラス
	聞く耳を持たぬ八十路の生身魂
	腕白の抜き足差し足鴉高音
	クライマックス見逃してより愁思かな
	シャンプーの泡立たぬ夫木の葉髪
三浦圭三	成人の日より禁煙決めにけり
	毒蜘蛛の日本侵略じわじわと
	雪達磨ここへそふだと独言
	冷凍庫ピラフの隣り雪達磨
	じつとみる手袋よりも大きな掌(て)
	蒲焼も絶滅貴惧種土用の日
	ひとり居へそつと寄りそふ冬の蠅

	雪女郎カイロいだきて寝てみたし
	我が夢は庭で焼芋三十個
	「おい・はい」と金婚迎ふ水仙花
水田麻理	目の前を通り過ぎて行くバレンタインチョコ
	また君を思い出してる鯉見上げ
	一年ぶり母の日だけの墓に花
	里山へ来たがる獣等冬近し
	頭から尻尾まで喰う初秋刀魚
	ラジオ音少しだけ大きく文化の日
	慣いだと鯨喰いつつ長談義
	開戦日幼稚園でも戦争ダメ
	紅白や知らない歌が多くなり
	わが為に電気ストーブ唸りおり
森岡香代子	餅焼きのがつぷり四つの大相撲
	蚕豆の大人のサイン見逃ず
	親芋の臍に集まる子沢山
	宇宙を広げておりぬ西瓜畑
	胡瓜の逃げる切り口つままれる
	気前よくくれる蜜柑や時期はずれ
	玉葱の本音にあらず泣き落し
	雑草の思影はなし七草粥
	完璧な形に眠かされ房葡萄
	前髪をバツサリ切られ大根葉
諸星千綾①	田舎では鯉も大きい端午かな
	夏帽子父の昼寝の長きこと
	居酒屋の椅子に金魚が忘れられ

	鶺鴒舟去りおでん舟来る大堰川
	大文字子ども一人に隠されて
	柿食えば一瞬真顔の亭主かな
	炉話に灰こねている左利き
	家族皆違うレンゲや晦日蕎麦
	年を経てよくしゃべる兄うどんすき
	初電話昨日の話の続きから
諸星千綾②	北窓を開いて鼻毛抜く夫
	スカートを履けば喜ぶ夫春
	女子会のたんぽぽ綿になりにけり
	父だけが育てる祭りの金魚かな
	数学の全部が嫌い夏終わる
	秋風やおやじ二人のクレープ屋
	着ぶくれてカフェの妊婦ら長居かな
	転職の責任を負う初御籤
	初夢の残業手当出ぬ仕事
	春近しコンビニの菓子見て廻る
八洲忙閑①	太鼓持ち鼻持ちならぬ初座敷
	福神の福因福果福寿草
	俳号の風のたよりや風信子
	目に云ふとメニューにありき目刺しかな
	羅や乳房の重み透けて見ゆ
	牛がへる濁音ばかりがぎぐげご
	酔はらひの酔眼やさし酔芙蓉
	衣被むきつつ籤を削りけり
	秘め事の隠しきれずや破れ障子

	CMの胃薬効きて薬喰ひ
八洲忙閑②	乱らなる風に恋して火水始め
	舌もつる新春シャンソンショウかな
	股のぞき三極の花咲く三ツ峠
	恋猫の横恋慕かな横しまな
	五月蠅いと呑み屋のおやぢ蠅叩き
	くねくねと蚯蚓の引くはみみず書き
	竹垣に竹架けにけり竹の春
	今朝のけふ気高く気丈菊薫る
	老いぼれの認知を忘れ年忘れ
	ゆつたりと湯量あふるる雪の宿
柳 紅生①	ビヤガーデン仮面の顔を脱ぎ捨てて
	いわし雲三十一脚ゴールせり
	畦草の茂り風評広ごりぬ
	雪女郎骨身にしみる水ごころ
	落鮎や腹に苦汁の色残り
	宿題の間雲に振る補虫網
	レントゲン写真のごとし鮫鰻吊る
	哀悼のタクトを振れり螢の火
	落し文酸いも甘いも噛み分けて
	ふらここや胸の痞への下りるまで
柳 紅生②	路地裏に太陽生まれしゃぼん玉
	水差せばなほ燃え上がりおでん酒
	朝寝して第六感の進化せり
	大部屋を宇宙遊泳新社員
	酒飲みを罟に藪蚊待ちにけり

	逆立ちの脚光を浴び蟹気楼
	畑を打つ百発百中なりしかな
	鉤になり棹にもなりて忘年会
	スナックの無愛想なる大金魚
	憂鬱の遊びごろのラムネ玉
山中麻衣	多汗症微妙滑稽汗ばかり
	年寄りの毛糸帽子は滑稽に
	着込み過ぎ微妙滑稽恰好が
	鳥につく名前滑稽うこっけい
	暖パンもはきかたにより滑稽に
	曲がる腰寒けりや余計曲がりゆく
	冬の日に似合う手袋ミトンかな
	年寄りのロングブーツは長靴に
	おしゃれだね言われブーツを脱げぬ姪
	短ブーも幼児がはけばロンブーに
山本賜	大根もつエコバッグには競走馬
	欲しさうな顔に自然薯いただきぬ
	落の臺少しずれてゐる井戸の蓋
	人生に落し穴あり双六も
	初鏡純白液は使ひかけ
	夫につづけ妻の腰痛十二月
	そこまでの花見にあれもこれも持ち
	マスク外せばパンの匂ふ駅ビル
	天井に映るわたくしクリスマス
	風邪に寝てマンハッタンをさ迷ひぬ
横山喜三郎	世界中虚飾に満ちてクリスマス

	父の日の話題は母へ母へ向く
	名があれば名折れもありて信長忌
	怪談を逃げては寄りてキャンプの夜
	駄馬の意地喝采よんで草競馬
	水鉄砲こどもの顔で応戦す
	掬ひきてはたと金魚を持って余す
	向日葵の笑ひ疲れを癒す真夜
	竹槍も展示されをり終戦日
	ファッションにかまけてをりぬ案山子どち
横山昌子	太陽に抱かれとろける雪だるま
	家中を敵にまはして蜥蜴飼ふ
	天国を覗いて来る揚雲雀
	喧嘩風系持つ父子大喧嘩
	地に足を着けたく氷柱伸びてをり
	青虫のつまみかげんを間違へし
	ここだけの話弾んで春の辻
	囃されてどんど火の粉シリウスへ
	女正月出窓へ猫の追ひやられ
	三猿の猿を手本に木の葉髪
吉原瑞雲	悪たれの孫も客なり西瓜切る
	お盆玉くれろ爺ちゃん諭吉好き
	ハッケヨイ立てぬ力士も秋の場所
	粋ですね後添え持たず白緋
	お元気でうば捨てられず帰り花
	ボケまいと木瓜を咲かせて実を酒に
	囚われて歯ざしりしてる蜆貝

	髪洗うこの俺捨てて毛が落ちる
	人も家も老いてひとすじ初日差す
	すき腹に浸みる蟬の時雨かな
吉原瑞雲	八十年生きても零余子ほどの欲
	サングラス親を脅すか帰省子は
	年寄りに席ゆずられる敬老日
	草刈って草につまづき老を知る
	雪達磨でかい顔して腰据える
	退職しず〜と藪入り疎まれる
	無職とは書かず待機と老いの春
	終戦日風呂敷解かれ眩し夜
	寝るほかにさして用なし老いの春
	宵越しの銭は外出かこの師走